ニュースナビ
News Navi
2020年
1月号

今月のテーマ

共同作業所運動の50年

■はじめに

2019年10月25日、26日にきょうされん第42回全国大会INあいちが名古屋国際会議場で開催されました。1969年に共同作業所第1号の「ゆたか共同作業所」が名古屋の地でスタートして50年。この節目の年に、全国から3200名近くの参加者が集まり、大会が開催されたことには大きな意義があります。今大会は、これまでの障害者運動の歴史と歩みを振り返り、いまだに課題が多く積み残されている現状を、共同作業所づくりの原点から見つめなおし、未来への実践、運動につなぐことを目的に実施されました。「変えてはいけないこと、次に引き継いでいくこと」を確認し合う、大切な機会となりました。

■共同作業所の誕生（歴史的背景）

ゆたか共同作業所が開設された1960年代、日本は高度経済成長期にありました。高度経済成長は障害者福祉施策にも影響をもたらします。急激な経済成長によって不足していた若年労働者に対し、国は軽度障害者に対する雇用政策を積極的に促進させます。

一方、働くことがむずかしいとされた重度障害者に対しては、施設収容などの保護政策を充実させる方向で進んでいきます。障害児教育のなかでも「能力主義」が取り込まれ、労働力のある者には、教育投資をするが、そうでない障害の重い人は経済効果の観点から切り捨てられていきました。結果、中重度障害者は学校を卒業した後に行く場がなく、在宅生活を強いられます。また、当時の名古屋市内には授産施設などの場が皆無に等しい状況であったことも大きな原因でした。

ゆたか共同作業所が設立された背景には、このような「働けない」「働くことは無理だ」と言われていた中重度の知的障害者に対し、学校の教師、親たちが「自分たちで子どもたちの通う場をつくろう」という想いのなか、ゆたか共同作業所の前身である「名古屋グッドウイル工場」の設立につながっていきます。

しかし、名古屋グッドウイル工場は親会社の取引先の倒産により、1年も経たないうちに閉鎖に追い込まれます。一方、職員をはじめ関係者は、この1年も満たない実践のなかで、働くことがむずかしいとされた障害者たちが、「活き活きと仕事にとりくむ」「子どもたちが通うなかで変化していく」姿を見て場の必要性を確信します。

工場閉鎖の翌日から、障害者の働きたいという要求を実現する運動が始まっていきます。当時を表す言葉として「柱一本でも持ち寄って」という表現があります。文字通り、親たちを中心に、共同財産、共同事業の理念で幅広く運動を展開していくのです。行政には公共性を訴え、土地、建物の提供を要求し、仕事の確保に奔走しました。

このなかで「働くことの権利の実現には、運動が必要」「利用している障害者のためだけではなく、広く障害者のための希望に満ちた作業所へ発展させていく」との運動の基礎がつくり上げられます。つまり、障害者の働く場づくりの運動が社会運動としての役割をもつようになってくるのです。結果、ゆたか共同作業所から始まった共同作業所づくり運動は、全国各地に広がっていきました。

■共同作業所づくり運動が大事にしてきたこと

共同作業所運動が全国的に広がった要因として、運動が大事にしてきたいくつかの点が深く関係しています。

一つ目は、共同作業所づくり運動は、単に作業所をつくるという運動ではなかったということです。障害者の「働きたい」という要求を、働く場の確保だけでなく、労働の発達と生活保障の権利としてとらえ、運動が展開されていきます。つまり、「働くことと学ぶことは、生涯にわたって人間としての能力を十分な限り発達させていくために必要不可欠」との発達保障の観点から実践が展開されました。

二つ目は、障害者を主人公にした実践が行われてきたことです。現場では障害当事者同士の話し合いや、一人ひとりの要求を引き出す実践がていねいに行われました。また、人間として当たり前のねがいや要求を実現するプロセスを通して、「当事者も含めて関わる人たちが人間的人格的な成長を促す」、そのような要素をもっていたことも共感を広げる大きな要因となりました。

三つ目は障害者の働きたいという想いを軸にして、その家族や関係者を巻き込みながら、幅広い人たちによって、共同、共感の幅を広げる運動が展開されたことです。障害者、家族が抱えている問題の解決方法を当事者も含め、幅広い人たちとの連携を通して考え、実現していく。障害者問題を関係者だけの問題に留めず、広く社会に訴え社会問題として位置づけたことも大きかったといえます。

■今後に向けて

共同作業所が誕生して50年。現在は地域に通う場すらほとんどなかった50年前とは大きく状況が変わり、社会資源や法整備も確実に拡充されてきています。

しかし、新自由主義における市場化のなかで「福祉はサービス」という新たな概念が強まってきています。サービスにおける対価を求められ、制度報酬も成果があるものには加算を上乗せするといった成果主義が強まっています。

今、本来の障害者運動の原点にあった「福祉は権利」という思想が分断されているように感じます。その意味において、50年前に始まった共同作業所づくり運動の理念や内実の重要性は、時代が経過した今日においても、変えてはいけない真理です。今、改めて歴史、運動の原点を学び、今後広げていくためには何が必要なのかを考えていくことが求められています。

今治信一郎
（いまじ しんいちろう）
ゆたか福祉会

グッドウイルが倒産して新しいゆたか共同作業所の前を歩く仲間

ゆたか共同作業所の創立メンバー（職員と仲間）